

63 旧制・新制東京歯科大学の校地・

校舎の変遷について

○山岸東太郎・石川 達也

明治二十三年から昭和二十年までの校地・校舎については、第十八回、第十九回日本歯科医史学会に報告した。今回は、昭和二十年八月の終戦から昭和三十三年の大学院の設置許可までの校地・校舎の変遷について報告する。

この期間の校地・校舎の拡充を、二期に分けることができる。(一)昭和二十一年七月から昭和二十七年三月までの旧制東京歯科大学、(二)昭和二十七年四月の新制東京歯科大学発足から昭和三十三年三月の大学院開設までの時期である。

(一)昭和二十一年七月から昭和二十七年三月までの旧

制東京歯科大学

昭和二十一年七月十九日、東京歯科大学は日本で初の歯

科大学(旧制)として認可された。学長には、奥村鶴吉が就任、就業年限予科三年、学部四年であった。この時点で大学の校地は、水道橋校舎と旧進学課程敷地を含め、52,703^坪(15,916^坪)であった。幸いにも昭和二十年の東京大空襲にもかかわらず、教職員の学校を守ろうとの果敢な行動により類焼を免れた水道橋校舎が厳然と残り、終戦後の教育・研究の場として十二分にその役割を果たしたのである。学部の教育は水道橋校舎で行えたが、問題は予科校舎であった。奥村学長をはじめ大学の首脳は、数カ所の家屋を物色した結果、市川の日本パイプ株式会社の青年学校の建物、付属実習所および独身寮四棟を百万円で買収、改造、整備し予科校舎とした。校舎は、二階建三棟、平屋一棟で、二階建二棟と平屋一棟を予科校舎にあて、残りの一棟は十二月に開設する市川病院としている。校門をくぐる正面が、第一校舎、左手が実験室である。第二校舎は、第一校舎の東北側に位置していた。

第一校舎は、延二百四十五坪二階建て、二教室、講堂、生物実験室、図書閲覧室、事務室であった。第二校舎は延二百八十四坪、コの字型一階建てで、六教室、生物研究室、

学長室、数学研究室、人文国語研究室、会議室、消費組合事務室、小使室などであった。物理・化学実験室は七十八坪、東向きの平屋であった。昭和二十八年十二月には運動場の隣地に予科校舎が新築落成し、講義が開始された。昭和二十五年から昭和四十七年にかけて、現市川総合病院の土地を十回にわたり購入した。

昭和二十四年に学部を開設し、予科より学生を迎えるに当たり、大学病院内の設備の整備、研究施設の改善・拡充が計られた。①ユニット、電気エンジンが、保存部診療室に各四十七台、補綴部診療室に各二十二台、矯正部診療室に各五台、保存部第二診療室に電気エンジン二台が新設された。②これに伴い各診療室の改装が行われた。③研究設備としては、補綴部研究室に四分一馬力モーターレーズ、保存部研究室にマイクローム二台および孵卵器一個を新設した。同年六月、医療法に基づいて申請し、同月に東京歯科大学病院として認可を受けた。

(二) 昭和二十七年四月新制東京歯科大学発足から昭和三十三年三月の大学院開設まで

昭和二十六年三月、私立学校法による学校法人として認

可され、同年十月、同法に基づき、新制東京歯科大学として申請し、翌昭和二十七年二月に認可された。ここに、新たな一歩を踏み出したのである。昭和二十九年七月、歯科教育基準が制定され、本学も基準に応じた進学課程の準備を進められ、昭和三十年一月に認可された。当面予科校舎を利用し、漸次、内容を充実させ、昭和三十四年十二月には、運動場の隣地に物理・化学教室も完成し、進学課程は一カ所に統合された。

(東京歯科大学)